

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01314

研究課題名(和文)「隠し売女」から「淫売女」へ 近世近代移行期における売春観の変容

研究課題名(英文) From Kakushibaijo to Inbaionna; the Transformation of the View of Prostitution in Transition from Early Modern to Modern Age

研究代表者

横山 百合子 (Yokoyama, Yuriko)

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・名誉教授

研究者番号：20458657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,300,000円

研究成果の概要(和文)：1872(明治5)年に制定された芸娼妓解放令は、“遊女の背後には必ず売春を強制する者がいる”という近世的な売春観から、“淫らな女が自ら売るのが売春である”とする近代の売春観への変容の起点をなすものであった。本研究は、これを明治初期における「売春の再定義」と位置付け、再定義が行われた国内状況および国際環境による原因を明らかにした。また、再定義以降の遊客、遊女屋(貸座敷業者)および、解放令にもかかわらず事実上の人身売買によって売春を強いられる女性たちの具体的な実態を解明した。この研究成果は、近世近代移行期の社会を連続と断絶の両側面から分析する上でのモデルを提供するものともいえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、身分制の論理に従って形成された近世の性売買システムが、「売春の再定義」以降の警察と医療施策による新たな管理体制に転換される過程に着目し、性売女性の主体的側面にも留意しつつ、日本における性売買の近世から近代への変容を明らかにした。これは、近世近代移行期の買売春の具体的な実態解明を通して、解放令を一片の紙切れとしてその意義を軽視してきた従来の見解を刷新するものである。また、展示による研究成果の社会的還元にも注力し、遊廓や遊女を無批判に美化する一般的風潮に対し、歴史的事実をふまえることの重要性を提起するものとなった。

研究成果の概要(英文)：Yujo Release Act, enacted in 1872 (Meiji 5), changed in the view of prostitution. In Edo period prostitutes were considered as women forced to sell sex by brothels through human trafficking, however in Meiji era, under the Release Act, they were characterized as licentious women who sold herself with their own will. In this project we clarified Yujo Release Act as a "redefinition of prostitution" in the beginning of Meiji era and found out that the redefinition was caused by the domestic and the international conditions. Furthermore, we showed the reality of brothels, customers and selling women(prostitutes) who were forced into sexual activities through actual human trafficking contrary to the Act. It can be understood that this conclusion produces a model to analyze the modern transformation from the perspective of continuity and discontinuity.

研究分野：日本近世史

キーワード：近代移行期 売春観 検梅 遊廓 芸娼妓解放令 遊女

### 1. 研究開始当初の背景

研究開始時点での歴史学における近世買売春研究の到達点の一つは、塚田孝、吉田伸之らが開拓した、近世身分制を意識して遊廓を分析する「遊廓社会」論である。「遊廓社会」論は、身分社会としての近世社会という見地に立ち、新吉原遊廓を構成する5つの町(身分共同体)に着目すると同時に、社会的権力としての遊女屋仲間とその下に編成される茶屋等からなる遊廓の構造を、都市社会の一構成要素として把握するものである。「遊廓社会」論は、それまでの好事家的議論や歴史の実態とかけ離れた文学的解釈による遊廓研究を克服し、遊廓を、一般的な近世社会史、都市史、地域社会論等と共通の土俵にたって論じうるものとしたといえよう。これに対して、近世の遊女や飯盛女など娼婦の生活の実態解明をふまえ、“主体としての遊女”の存在を強調する曾根ひろみらによる近世女性史研究からは、「遊廓社会」論には、遊廓のもっとも重要な構成要素である遊女が組み込まれていないとの批判も提出されていた。

一方、「遊廓社会」論は、近世に限らず、近代日本における性売買研究にも援用されてきたが、そこでは、近世近代移行期日本の性売買における連続と断絶の両面が十分に意識されておらず、近世以来の連続面の強調に比して、近世近代の差異が具体的に解明されていない点が問題点として浮上していた。近世近代の買売春の法的位置付けの相違点、近代の警察と検梅による管理・統制が地域社会と性売女性に及ぼした変化、国際環境の変化による人身売買と性売買の位置付けの変化の解明などは、いずれも課題として残されている状況にあった。

以上の研究状況からは、「遊廓社会」として定義された遊女屋仲間を核とする社会的権力と遊女の間の本源的な矛盾の具体的な解明という課題が浮上すると同時に、性売買の場における主体としての遊女の実像に迫ることが近世近代に共通する課題となっていたといえよう。このような研究状況下、本研究では、移行期の性売買の変化を見るためのキー概念として、1872(明治5年)の芸娼妓解放令(以下、解放令)を「売春の再定義」(代表者著『江戸東京の明治維新』岩波新書、2018)と規定し、このような移行期の売春観の変化を手がかりとすることで、近代移行期における性売買の実態や、主体としての女性の実像解明の進捗が期待できるのではないかとこの着想を得るに至った。

「売春の再定義」とは、“合法・非合法を問わず、遊女にはその身体を所有する者がいて、性を売らされている”とみる近世の売春観から、売春は「自売」すなわち“自ら売る淫らな女”によって行われるものだという近代の売春観への転換を指す概念である。近代日本における性売買を特徴づける貸座敷業者や買春男性の不可視化、および娼婦への蔑視・スティグマ化の起点が「売春の再定義」にあり、そのような転換点を生み出した社会的実態が明らかになれば、近世近代の買売春の連続と差異の諸相をより明確に把握しうるであろう。また、近代移行期における遊廓の変容過程をそのような視点から総合的に検討していくことで、従来の遊廓研究の孕む諸課題が克服されることが予想された。

### 2. 研究の目的

本研究は、上記の研究状況とキー概念設定をふまえ、以下の三つの目的の達成をめざすものである。

政治史、国際関係史および医学史の視点と成果をふまえて地域社会の性売買の実態の実証的解明を行い、「売春の再定義」とその結果としての売春観の変容が、近代日本においていかなる意味をもったのかを明らかにすること。

“主体としての女性”という女性史の提起する視座をふまえ、性売買における女性への抑圧的なジェンダーを、遊廓の孕む内在的な矛盾として具体的に把握し、近代移行期におけるその変容を遊廓の構造と関わらせながら動的に把握すること。

を通して、身分制解体と近代化が進行する幕末から明治前半期の性売買の連続と断絶の様相を、地域社会の実態、および社会意識の双方向からとらえると同時に、国際関係に基づく政治・社会的変化も考慮し、移行期研究の一つのモデルを提示すること。

### 3. 研究の方法

～ の目的を達成するため、本研究では、中心的なフィールドを、幕末から明治前半期までの東京・横浜とし、公文書および近代初期の政治家・官僚文書の当該問題に関わる部分を広く調査・収集すること、同時に栃木県喜連川地域、長野県須坂・中野地域などの在地史料も用いて、地域医療や地方遊廓史料の調査・収集と分析を行い、上からと下からの双方の視点から総合的に考察を進めることを目指した。

具体的には、解放令制定前後の政策決定過程を示す井上馨関係資料、岩倉関係文書、江藤新平関係文書、および東京府文書の調査・収集を行い、解放令前後の政策担当者の売春観と政策決定過程の考察を進めるとした。また、伝染病法に反対するイギリスのフェミニズム運動など、当該期の国際環境の変化とその国内への影響を明らかにするため、分担者森田朋子による研究の到達点をふまえて外務省外交史料館所蔵史料を精査するほか、イギリス海軍省文書、イギリス外務省文書などの調査を行い、買売春をめぐる国際的環境の影響についてより詳細な把握を行うこととした。

一方、「再定義」による新たな売春観登場前後の、遊廓・地域社会と娼婦との相克およびそこ

での娼妓自身の苦悩と葛藤の実情を明らかにし、地域社会における性売買のありようを把握するため、旧幕府引継書、東京府文書（東京都公文書館蔵）、坂本幸右衛門家文書（須坂市文書館蔵）、新吉原名主竹島家文書（東北大学附属図書館蔵）の精査を行うこととした。特に、坂本幸右衛門家文書には、新吉原遊廓の客や利用実態を示す史料が相当数ふくまれていることが判明していたものの、詳細な目録が作成されていないため、利用上の制約があった。そこで、所蔵者である須坂市文書館との協力により、坂本家文書の調査と詳細目録作成を行い、積極的な利用を進めることとした。医療関係史料についても、東京・横浜以外の地域における買春の実態や近代の医療による買春への介入実態を明らかにし、地域社会の側と娼婦との矛盾・葛藤を考察することとした。特に、検梅による娼妓の管理実態の解明は重要な課題であり、喜連川地域医家史料（個人蔵）の活用を図ることをめざした。

以上の史料調査・収集・分析は、基本的には、代表者と分担者がそれまでの研究実績をふまえて分担し、独自に実施することとしたが、必要に応じて柔軟に協力体制を組んだ。また、本研究においては、成果発信の方法として、論文、シンポジウムに加え、展示による市民への発信も重視した。そのため、国立歴史民俗博物館企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」プロジェクト、および同館の基幹研究「近代日本における産業・労働の展開とジェンダー」とも積極的に交流し、同展示による成果発信をおこなった。

#### 4. 研究成果

本研究の成果として、雑誌論文 10（うち査読あり 1）、学会発表 19（うち招待講演 11、国際学会報告 1）、図書 10 冊（単著 1、編著 3、分担執筆 6）を得た。また、初年度と最終年度の二度、一般公開によるシンポジウムを開催した。これらの成果により、本研究の三つの目的は、以下の通り達成することができた。

身分制解体と近代化が進行する幕末から明治前半期の買春の連続と断絶の様相を検討する上で、近世における買春公認の意味を正確に捉えることは必須である。従来、法制史研究においては、犯罪者取締りを遊廓設置の目的とする見解が通説であったのに対し、本研究では、兵農分離下、男性人口の過大な諸都市において、売春業の公認と独占によって都市全体の性売買の管理統制を図ることが、遊廓の本源的役割であるという新たな知見を得ることができた。これは、近世遊廓の性格をより深く理解するうえで重要な成果だと考える。また維新後、そのような管理体制が解体し身分的役に基づく性売買統制の困難が顕在化したところに、警察および医療による性売買の把握と統制が出現したことを、太政類典・公文録・東京府史料などの諸史料から、具体的に明らかにすることができた。

一方、国際関係の視点からの検討については、COVID-19 拡大のため研究期間内の海外調査が困難となり、特に明治初年についての史料環境を十分に整えることができなかった。そのため、代替措置として、主に国内文書やウェブサイトで閲覧可能な公文書を使い、横浜を中心に明治 30 年代後期まで検討の射程を伸ばし、不平等条約体制のもとでの外国人遊廓および外国人経営者に対する買春統制の実態解明を試みた。その結果、治外法権下の居留地内で容認された外国人向けの私娼の実態および警察・医療による管理の杜撰な実態が明らかになると同時に、不平等条約体制下の買春の管理統制政策の特質解明および条約改正後の変化という、新たな課題を見出すことができた。

また、地域社会における警察および医療を通じた性売買の管理統制については、主に医療関係史料を用いて、栃木県喜連川地域での検梅実態の具体的解明に努め、近代社会における買春の拡大深化の実態と売春観の変化のもとでの娼妓の苛酷な現実を明らかにした。

以上の検討により、本研究全体を通して、解放令という近代初頭の法制度によってもたらされた新たな売春観が、近代の地域社会における性売買の拡大にともなって次第に広く浸透し、医療と警察による管理がさらに娼妓への蔑視を固定化し強化していったこと、また、近世では希薄だった貸座敷業者による帳簿を用いた売買収益管理という経済的支配が強化され、実質的には人身売買であるにもかかわらず、娼妓自身が自売という建前を受容し、さらにスティグマとして蔑視を内面化していくという仮説を、具体的に論証することができた。

“主体としての女性”の視点にたち、遊廓に生きる女性たちの主体構築の過程とその内実を、遊廓の構造とその変容をも視野に入れて動的に把握するという二つ目の課題については、東北大学附属図書館蔵の新吉原名主文書「新竹島記録」に含まれる遊女の「日記」史料を用いたほか、長野県須坂市の豪農坂本幸右衛門家文書を、周辺地域の中野市山田家等の豪農文書と付き合いながら分析し、以下の成果をあげた。

一つは、遊女自身が記した「日記」や書状を遊女のリテラシーを勘案しながら検討し、遊女の生活実態と遊女集団の特質を明らかにしたこと、二つ目に、遊女への暴力、遊女間の序列と競争の組織化と可視化、暴力、経済的圧迫など、遊廓における遊女への管理・統制のシステムを解明したこと、三つ目に、そのような遊女への抑圧が遊廓をめぐる社会構造を揺るがす基底的要因になっていく過程を明らかにしたこと、四つ目に、近代の医療関係史料から、検梅の実態や性感染症の浸透とそれによる娼妓たちの苛酷な感染・健康状況を浮かび上がらせたこと、である。これらに基づく成果論文、学会報告および展示による発信は、近代移行期に固有の「遊廓社会」と遊女の間緊張・抑圧の関係を描き出し、解放令による近世遊廓の解体と売春観の変容を、当該社会の内在的な矛盾の帰結として位置付けたものとして、多くの反響を得た。

近世から近代への地域社会の変容の過程を社会意識と社会実態の双方向からとらえ、移行期研究の一つのモデルを提示するという三つ目の課題について、本研究では、の成果に基づき、

遊廓を「悪所」として特殊視し、近世社会一般から切り離して捉えようとする文学研究を含む一般的な遊廓観、売春観と対峙し、地域社会において醸成される内在的な要素と近代移行期の対外関係から生み出される葛藤の複合として遊廓をはじめとする性売買の諸相を捉えるという新たな見方を提起することに成功した。これは、旧来の新吉原研究の刷新にとどまらず、近世近代移行期の地域社会研究のモデルの一つとして有効なものとする。

以上の成果は、論文、書籍のほか、最終年度の中部大学人文学部歴史地理学科主催・本科研共催によるシンポジウム「幕末から近代における性の売買」での総括的な諸報告によって広く学界に発信した。また、本研究では、第2年次に行った国立歴史民俗博物館企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」（2020年10月6日～12月6日）で成果の一部を展示し、来館者および広くメディアを通じた成果の社会的還元を努めた。本研究におけるこのような成果発信の手法は、歴史の実態を無視し近世の性売買を美化して描く近年の社会的傾向にたいする警鐘としての意味をもつこととなり、新聞、雑誌、ラジオ、インターネット上で関心を集めた。以上、学知の社会的還元の局面においても、本研究は、重要な役割を果たすことができたものとする（メディアにおける記事・批評などの詳細は、2022年9月刊行予定拙稿「共同研究の経過と概要」『国立歴史民俗博物館研究報告』第235号、参照）。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 横山百合子	4. 巻 944
2. 論文標題 遺跡を尋ねて 第 期(第5回)新吉原 遊女小稲と幕末維新期の新吉原遊廓	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学士會会報	6. 最初と最後の頁 68～76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川 和花	4. 巻 241
2. 論文標題 医療の<近代化>と施療・救済の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史科学	6. 最初と最後の頁 15～19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山 百合子	4. 巻 24
2. 論文標題 東京の明治維新—錦絵にみる町方住民の意識と維新政府の統治—	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 経済史研究	6. 最初と最後の頁 1～20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24712/keizaishikenkyu.24.0_1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森田朋子・林沙也加	4. 巻 45
2. 論文標題 資料紹介：横浜梅毒病院の運営費と「商館行」遊女	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学部研究論集	6. 最初と最後の頁 1～28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横山百合子	4. 巻 864
2. 論文標題 「日記」を書く遊女たち：他者として遊女の「日記」を読むということ（特集 日記がひらく歴史のトピ ラ）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 REKIHAKU	6. 最初と最後の頁 91～95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 109
2. 論文標題 「隔離」と「療養」を再考する：COVID-19と近代日本の感染症対策	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 専修人文論集	6. 最初と最後の頁 235～256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 247
2. 論文標題 ハンセン病歴史研究の新地平を切り拓く 本書の意義と課題（書評：松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史科学	6. 最初と最後の頁 19～29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山百合子	4. 巻 864
2. 論文標題 書評 沢山美果子著『性からよむ江戸時代 生活の現場から』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 91～95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山百合子	4. 巻 22
2. 論文標題 遊廓から見た明治維新 日本洋画の父「高橋由一の油彩画「花魁」をめぐる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 開国史研究	6. 最初と最後の頁 6～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山百合子	4. 巻 231
2. 論文標題 遊廓の明治維新 身分とジェンダーの視点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人民の歴史学	6. 最初と最後の頁 14～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 11件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 「遊女の群像 身分制解体期における「財」から「主体」への遊女の変容」
3. 学会等名 日本史研究会近現代史部会6月例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村俊行
2. 発表標題 イギリス性売買史研究の状況 主体性・統治・犯罪化
3. 学会等名 JSPS科研費19H01314主催近世近代移行期における売春観の変容研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 明治後期～大正期日本の梅毒罹患と地域社会 栃木県塩谷郡喜連川町の事例から
3. 学会等名 JSPS科研費19H01314主催近世近代移行期における売春観の変容研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣川 和花
2. 発表標題 宮崎千穂「医療警察、感染源追求、非感染証明 ロシア帝国の中央アジアにおける 梅毒との闘い 」へのコメント
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 非常勤研究員セミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣川 和花
2. 発表標題 日本における感染症史研究の現状と課題
3. 学会等名 専修大学社会科学研究所定例研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣川 和花
2. 発表標題 日本の感染症史研究の現状と課題
3. 学会等名 医学史と社会の対話 オンラインセミナー「医学史研究者と考える 感染症の過去と未来」
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 歴博企画展示「性差の日本史」の成果と課題－「第6章性の売買と社会」を中心に－」
3. 学会等名 JSPS科研費19H01311主催遊廓社会研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 国立歴史民俗博物館企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」 成果と課題 私論
3. 学会等名 大阪歴史科学協議会5月例会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 遊廓の明治維新 - 身分とジェンダーの視点から -
3. 学会等名 東京歴史科学研究会入門講座（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 歴史から見る社会システムのジェンダー化 企画展示「性差(ジェンダー)の日本史」を素材として
3. 学会等名 京都大学人文研究所 性差の研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 遊廓からみた明治維新～日本洋画の父 高橋由一の油彩画「花魁」をめぐって～
3. 学会等名 横須賀開国史研究会総会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 芸能から性の搾取まで 「遊女」の歴史をふりかえる
3. 学会等名 総合研究大学院大学文化フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuriko Yokoyama
2. 発表標題 Comment: Characteristics of Recent International Researches on the Meiji Restoration
3. 学会等名 7th Biennial International e-Conference of the Japanese Studies Association for Southeast Asia Plenary Session（招待講演） （国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 展示を創る 女性史・ジェンダー史の豊かさの中で
3. 学会等名 東京女子大学 2021年度第36回女性史青山なを賞特別賞 公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 女性史・ジェンダー史資料の調査と研究 「性差(ジェンダー)の日本史」展から考える
3. 学会等名 国立女性教育会館 令和3年度女性アーカイブ研修(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山百合子
2. 発表標題 徐智瑛氏「植民地時代における妓生の研究( ) 妓生集団の近代的再編の様相を中心に 」へのコメント
3. 学会等名 JSPS科研費20K12454主催2021年度植民地遊廓科学研究会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森田朋子
2. 発表標題 明治期横浜におけるラシャメンの事例ーミルラー事件を手掛かりにー
3. 学会等名 シンポジウム「幕末から近代における性の売買」中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究科歴史学・地理学専攻主催/JSPS 科研費19H01314共催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 伝統社会の生存システムと医療の近代化 栃木県塩谷郡の事例から
3. 学会等名 近現代史研究会第12回大会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 医療史から読み解く性売買 大正期喜連川病院・米沢福田遊廓の史料から
3. 学会等名 シンポジウム「幕末から近代における性の売買」中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究科歴史学・地理学専攻主催/JSPS 科研費19H01314共催
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 廣川和花(秋田 茂、脇村 孝平編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 392
3. 書名 ハンセン病者の社会史 日本の近代化の中で(人口と健康の世界史)	

1. 著者名 Yuriko YOKOYAMA (Bettina Gramlich-Oka, Noriko Sugano, Anne Walthall and Fumiko Miyazaki ed.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 University of Michigan Press	5. 総ページ数 23/289
3. 書名 Chapter9 Expanding and Multilayering Networks in Nineteenth-Century Japan: The Case of the Shin-Yoshiwara Red-Light District (Women and Networks in Nineteenth-Century Japan)	

1. 著者名 横山百合子・廣川和花・辻浩和・村和明・人見佐知子・小野沢あかね	4. 発行年 2020年
2. 出版社 一般財団法人歴史民俗博物館振興会	5. 総ページ数 49/314
3. 書名 性差(ジェンダー)の日本史 第6章 性の売買と社会	

1. 著者名 須坂市文書館	4. 発行年 2021年
2. 出版社 須坂市文書館	5. 総ページ数 382
3. 書名 須坂市域の史料目録 第11集(目録と解題)	

1. 著者名 横山 百合子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 36/284
3. 書名 長谷川 貴彦編 エゴ・ドキュメントの歴史学 第6章 遊女の「日記」を読む	

1. 著者名 横山百合子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 18/272
3. 書名 高埜 利彦編 近世史講義 第13講 遊女の終焉へ	

1. 著者名 国立歴史民俗博物館、「性差の日本史」展示プロジェクト	4. 発行年 2021年
2. 出版社 集英社インターナショナル	5. 総ページ数 221
3. 書名 新書版 性差の日本史	

1. 著者名 Yuriko Yokoyama	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 165 ~ 172/293
3. 書名 Revisiting Japan's Restoration: New Perspectives to the Study of the Meiji Transformation	

1. 著者名 横山百合子著・張敏 / 丁諾舟訳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上海人民出版社	5. 総ページ数 196
3. 書名 『从江戸到東京：小人物們明治維新』	

1. 著者名 廣川和花	4. 発行年 2022年
2. 出版社 公益財団法人日韓文化交流基金	5. 総ページ数 1-300
3. 書名 第21回日韓歴史家会議報告書「伝染病と歴史」（廣川和花「日本における感染症史研究の現状と展望」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>2020年10月6日～12月6日開催国立歴史民俗博物館企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」における第六章「性の売買と社会」において研究成果を発表し、学界および各種メディアから大きな反響を得たほか、インターネット番組「ニコニコ美術館」のアーカイブ放送は、本研究による成果を広く発信する機会となっている。</p> <p><a href="https://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/project/old/201006/index.html">https://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/project/old/201006/index.html</a>  <a href="https://live.nicovideo.jp/watch/lv329020864">https://live.nicovideo.jp/watch/lv329020864</a></p> <p>また、研究の最終年度に刊行した『新書版性差（ジェンダー）の日本史』（集英社インターナショナル、2021）は、同展示プロジェクトによるものであるが、本研究成果が十分に盛り込まれている。</p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	廣川 和花  (Hirokawa Waka)  (10513096)	専修大学・文学部・教授    (32634)	
研究分担者	森田 朋子  (Morita Tomoko)  (80293108)	中部大学・人文学部・教授    (33910)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関